

Title	プトラジャヤ：イスラーム的都市景観の理念と現実
Author	多和田, 裕司
Citation	人文研究. 67 卷, p.85-104.
Issue Date	2016-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	湯浅恭正教授：美濃正教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

プトラジャヤ：イスラーム的都市景観の理念と現実

多和田 裕 司

本稿は、マレーシアの新しい行政首都プトラジャヤのイスラーム的な建築群を事例にして、グローバル化した社会におけるイスラーム実践について検討する。1980年代以来の「イスラーム化」の進展にともなって、マレーシアでは国家的建築物に、土着的、近代的な意匠に代わって中東イスラーム的なものももちいられるようになった。本稿では建築様式や都市景観における近年のこのような変化について考察を加える。序に引き続いて、第2節ではマレーシアの代表的モスクを材料に建築様式の変遷について論じる。第3節ではプトラジャヤの形成過程と、そこでの建築および景観における中東イスラーム的な様式について紹介する。第4節では、建築における中東への指向が、UMNOとPASというマレー系内部での政治対立、およびマレー系対非マレー系という民族的な対立に関連づけて論じられる。第5節では、プトラジャヤの中東イスラームへの指向を、「テーマ化」と「俗都市化」という観点から検討する。最後に、プトラジャヤの「イスラーム化」は、イスラームの原理とポストモダン時代における諸都市に共通する要因の両者によって引き起こされたものであると結論される。

1 イスラーム実践としての都市景観

2001年、クアラルンプールの南に広がるアブラヤシのプランテーションのなかに、新たな都市が誕生した。イスラーム的意匠と近未来的な外観の建物が立ち並ぶこの街は、初代首相アブドゥル・ラーマン・プトラの名前にちなみプトラジャヤ (Putrajaya) と名付けられた。誕生からおおよそ15年が経過した現在においても、まだ街のいたるところに見られる建設工事中の高層ビルは、この街のさらなる成長を予感させる。いまやマレーシアの行政首都として政府省庁の移転も完了し、人口規模も7万人近くまでになった。きわめて人工的、計画的に造られた都市景観や、独特な形状の建築物は多くの注目を集め、都市そのものが国内外からの観光客を呼び込む観光地でもある。

マレーシアにとってプトラジャヤの建設は、たんなる行政機能移転のための新都市建設という以上に、国家の将来像ともかかわる一大プロジェクトであった。プトラジャヤの生みの親ともいべきマハティール第4代首相が掲げた2020年に先進国入りを目指すという「2020年構想 (Wawasan 2020)」のもと、将来の先進国としてのマレーシアのあるべき姿が、この都市のなかに文字通り体现されているといっても過言ではない。入念に計画された建築群や道路、人工的に造られた湖、各所に点在する公園、コミュニティ意識が生まれるように意図された住居地区¹⁾ など、プトラジャヤは、現在の首都であるクアラルンプールとはまったく対照的な都市

となっている。

プトラジャヤでなによりも目につくのが、イスラーム的な意匠が施された建築群である。とくにプトラジャヤ中心部の高台に位置する首相官邸が戴くドーム状の形状は、この国がイスラームによって統べられていることを視覚的に示すものとなっている。

本稿は、プトラジャヤにおける都市景観のイスラーム的な意匠を題材にしなが、現代社会においてイスラームが実践されるありかたを考察するものである。従来、イスラームは現代社会とは相容れない、あるいは現代からは隔絶した宗教であるにとらえられることがもっぱらであった。しかし、グローバル化によって経済や文化や情報が相互浸透する現代という時代にあつては、イスラームの実践もまたそのなかに置かれているはずである。

筆者はこれまで現代社会におけるイスラーム実践を、イスラームの理念とイスラームに外在する要因との相互作用のなかにとらえてきた。イスラームに外在する要因とは、たとえば男女平等などの「普遍的」とされる価値観、経済的利益の追求、消費社会におけるファッションへの指向などである。これらはいずれも、イスラーム法制の制度化〔多和田 2007, 2008〕、ハラール認証制度〔多和田 2012〕、イスラームを対象にした観光〔多和田 2014〕、ムスリム女性のかぶるベール〔多和田 2015〕などの形をとって、イスラームのありかたに大きな影響を与えている。もちろんイスラームはすべてを規定する存在であるという、護教論的、「原理主義的」な立場に立てば、そもそもイスラームには外部など存在しないということになるだろう。しかし、現実の経験的事実に照らし合わせたとき、上に挙げたようなイスラームの外部というべき要因がイスラーム実践にたいして深く作用しているのであり、これらを見捨てて現代社会におけるイスラームを論じることはできない。

イスラーム的な意匠に彩られた都市、プトラジャヤについてもこれは同様であるはずである。都市の計画や発展は、たんにイスラームの理念だけによって基礎づけられているわけではない。後述するように、そこには、特殊マレーシア的な社会状況やグローバル化が進むなかでの都市に共通する機構ともいえるものが働いている。あるいはときとしてイスラーム外部の要因が強く働き、イスラームの理念を狭めてしまうことすら生じているかもしれない。本稿は、建築物に表象されたイスラームという具体的事例を手がかりに、現代社会におけるイスラームの(再)定式化をとらえようとする試みである。

2 イスラームと都市景観の変遷

プトラジャヤについての具体的検討に入る前に、マレーシアの都市における都市景観とイスラームとの相関について歴史的な概要を示しておきたい。それによってイスラームがいかにイスラーム外的な要因によって影響されてきたか、そしてその延長線上にあるプトラジャヤに影響する外的要因がいかに現代という時代に特殊なものであるかが理解されるであろう。

マレーシアの都市では、つねにイスラームが都市の象徴的意匠としてもちいられてきた。15世紀に繁栄を極め、その後西洋列強によって支配下に置かれたマラッカを別にすれば、この地に都市と呼べる空間が生まれたのは、イギリス植民地時代においてのことである。植民地時代に開発された錫鉱山やプランテーションで働くために中国やインドから移り住んだ移民労働者の集積地こそが、その後マレーシアの都市として発展したのである。その意味で、マレーシアの都市は、本来的には非イスラーム的な色彩の強い場所であった。首都クアラルンプールも、そのようにして生まれた都市のひとつである。

しかし、都市が非イスラーム的色彩を帯びる一方で、政治的な支配層はマレー人、すなわちムスリムの人々であった。イギリスによる植民地化以前、マレー半島にはスルタンと呼ばれるマレー人の王が支配するいくつかの小王国が並立していた。イギリスは、それら小王国のスルタンと交渉し、あるいは影響力を行使することで、植民地支配を確立していったのである。パナンヤシガポールのイギリスの直轄領化（「海峡植民地」と称された）も、それぞれの島を有するスルタンからの割譲によるものである。錫鉱山の採掘権やゴム・プランテーションのための土地の確保なども、スルタンとの取引のなかで獲得されていった。その結果、イギリス植民地時代のマレー半島は、イギリス人およびスルタンなどのマレー人支配層を頂点とし、その下に植民地経済の担い手である中国人、インド人が座を占め、それとはまったく別のところに主として第一次産業に従事するマレー人が位置するという、いわゆる「複合社会」〔Furnivall 1948〕が形成されていたのである。

したがってそれぞれの王国にたいする支配の正当性は、たとえ形式的なものであったとしてもマレー人スルタンの側にあるのであり、その結果、彼らが信奉するイスラームこそが、移民労働者とともに定着した他の諸宗教に比して、重要性を付されていたのであった。マレー人スルタンの権威とともにあったイギリスは、イスラームを利用することで自らの力の可視化を計ろうとする。イギリス植民地時代に建てられた主要建築物にはすべて、イスラーム的な意匠が施されていた。

その代表的なものが、クラン川、ゴンバ川が合流するクアラルンプールの発祥点ともいえるべき一帯に立ち並ぶ一連の建築群である。クアラルンプールは1857年、クラン地方の領主であったラジャ・アブドゥラーが内陸部に錫鉱山開発のための探検隊を派遣するというところから始まった〔Gullick 1994〕。中国からの移民によって編成された探検隊が下流から川をさかのぼり、上述の二つの河川の合流点にまで到達した後、さらに内陸に良好な鉱山を発見した。この鉱山一帯を後背地とする形でクアラルンプールの発展が始まったのである。クアラルンプールの経済的重要性が高まるなか、1880年イギリスは、植民地行政の中心ともいえるべき理事官駐在地を当初のクランからクアラルンプールへと移動させる。これを契機に急速に発展しつつあったクアラルンプールを英領マラヤの中心都市とするべく、イギリス人たちの手によって次々と都市基盤が整備されていった。

クラン川、ゴンバ川の東側に広がる市場を核とした中国人居住区にたいして、イギリスは西側に政府機関を集中させた。1909年、クラン川とゴンバ川が交わる地に、クアラルンプールで初めてとなるモスク、ジャーメ・モスクが建設された（写真1）。モスクは、行政庁が置かれた



写真1 ジャーメ・モスク

スルタン・アブドゥル・サマド・ビルディング（1897年）（写真2）、クアラルンプール駅（旧駅）（1911年）などとともに、公共事業省（Public Works Department）に属するイギリス人の設計によるものである。

ジャーメ・モスクはふたつの点でマレーシアのモスク建築における、ひとつの画期をなしていた。それは、第一に、このモスクが表象するものがこの地に根付いたイスラームではなく、イギリス人の目を通したイスラームであるという点であり、第二に、このモスクを契機として東南アジアの伝統的なモスク形式からジャーメ・モスクに示されたそれらに変わっていくことになったという点である。

スルタン・アブドゥル・サマド・ビルディング（1897年）（写真2）、クアラルンプール駅（旧駅）（1911年）などとともに、公共事業省（Public Works Department）に属するイギリス人の設計によるものである。



写真2 スルタン・アブドゥル・サマド・ビル

この時期のクアラルンプールにおいてイギリス人設計者によって建てられた建築物に共通する特徴は、英領インドに端を発する様式がもちいられていることにある。いずれも、ヨーロッパの歴史的建造物に見られるような均整と左右対称性を取り入れるとともに、それにムガル宮廷風のインドのイスラーム的な装飾を施し、玉葱型のドームを備えている〔Gullick 1998, Pertubuhan Akitek Malaysia 2007, Mohamad Tajuddin 2007〕。イギリスは土地の支配者たちが有する文化的、宗教的指導性との象徴的な結びつきを示すものとして数多くのモスクを建てたが、その際ムガルにおいてすでに見いだしていた様式を独自に解釈しもちいたのであった〔Mizan 1998: 85〕。

主としてイギリス人技師により玉葱型のドームを備えたモスクが造られる以前の、マレー半島部における伝統的なモスク建築はおおきくふたつの型にわけることができる〔Kamaruddin 1997: 255〕。ひとつは主として半島北部に集中する様式で、二面からなる逆V字型の屋根を有するなど、家屋の建築様式をモデルとするものである。いまひとつは、とくにマラッカに集中してはいるもののこの地域全域において観察することができるもので、正方形の高床の上にピラミッド型の屋根が三層から五層程度重なるような構造を有している（写真3）。この構造は



写真3 カンボン・クリン・モスク（マラッカ）

イスラーム到来以前のヒンドゥー・ジャワ的な寺院建築様式と通底するものであり、四面の屋根は四方に広がる中心の力を示していた〔Kamaruddin 1997: 256〕。しかしこれらのモスクはイギリス植民地時代に先に述べたような玉葱ドーム型のモスクに取って代わられていったのであった。



写真4 国立モスク

1957年のマレーシアの独立は、建築におけるイスラーム的意匠にも大きな変革をもたらした。それを代表するのが、1965年に設計された国立モスクである（写真4）。国立モスクは、それまで主流であった厳密な左右対称性に基づいて構築されたモスクとは大きく異なっている。機能性を重視した空間配置、直

線的なデザイン、幾何学的な格子模様で装飾された壁など、従来にない様式が取り入れられ、マレーシアにおけるモダニズム建築を代表するもののひとつとされている〔Mizan 1998: 87〕。

同時にこのモスクは、様々な点においてマレーという民族的アイデンティティを包含するものととらえることもできる〔Mohamad Tajuddin 1999: 75-76, Goh and Liauw 2009: 73〕。たとえばこのモスクの外観上の最大の特徴は、玉葱型のドームが姿を消し、その代わりに広げた傘のような屋根を配したことにあるが、傘は王や王権の象徴であるとともに、この形態はすでに述べたようなマレー世界に伝統的な形態を模したものである。開放的な壁面や回廊、柱に支えられた高床の構造などにはマレー家屋との類似を見ることができる。

この時期、国立モスクとならんで、国立博物館や国立競技場など「国立」（Negara：文字通りには「国家」）と名のつく大規模な公共建築が次々に建てられていった。そのいずれもが伝統的なマレーの要素をモチーフとして取り入れていることを考え合わせると、このモスクの形態にその当時における国教としてのイスラームのあり方を読み取ることができよう。この時期においてイスラームは「マレー」と同義であった。

1980年代後半になると、いわゆるイスラーム復興現象のなかでマレーシア都市部におけるイスラーム的意匠はいまいちど大きな転機を迎える。

1969年の民族衝突を契機に強化されたマレー系優遇政策は、就業や教育等において政府の後押しを受けたマレー人の都市への移住を加速させた。それによって1980年代に入るとクアラル

ンプールは「郊外」へと大きく拡大し、従来非マレー系住民が多くを占めていたクアラルンプール中心地域と（行政的にクアラルンプールに含まれると含まれないとにかかわらず）それを取り囲むように発展した新興のニュータウンという構図ができあがった。このようなマレー人ムスリムの増加にあわせるかのようにクアラルンプール近郊に次々と新しいモスクが建設されていったが、この時代を代表するモスクがすべて遠く中東のそれを模した様式となっているのである。

そのさきがけとなったのが、クアラルンプール郊外のシャー・アラムに1988年に完成したスルタン・サラフディン・アブドゥル・アジズ・シャー・モスクである〔Goh and Liauw 2009: 76〕（写真5）。1974年、クアラルンプールはスランゴール州から連邦直轄領として分離した。



写真5 スルタン・サラフディン・アブドゥル・アジズ・シャー・モスク

それを受けて、スランゴール州の新たな州都となったのがクアラルンプールの南西に位置するシャー・アラムであった。完成時点でマレーシアでは第一の、東南アジア全体を見ても第二の規模を誇るスルタン・サラフディン・アブドゥル・アジズ・シャー・モスクは、簡素な幾何学的スタイルでシンプルな形態のドームを有し、ミナレットと呼ばれる尖塔がドームを冠した礼拝堂の四隅を取り囲んでいる。さらにモスクの内外はイスラーム書道その他の装飾が潤沢に施されている。同様の傾向は、

イスタンブールのスルタン・アーメド・モスク（通称ブルー・モスク）やおなじくイスタンブールの、15世紀オスマン朝時代にはモスクとしてもちいられていた聖ソフィア大聖堂に類似した外観を持ったクアラルンプール連邦直轄領モスク（2000年）においてさらに顕著に見て取ることができる。

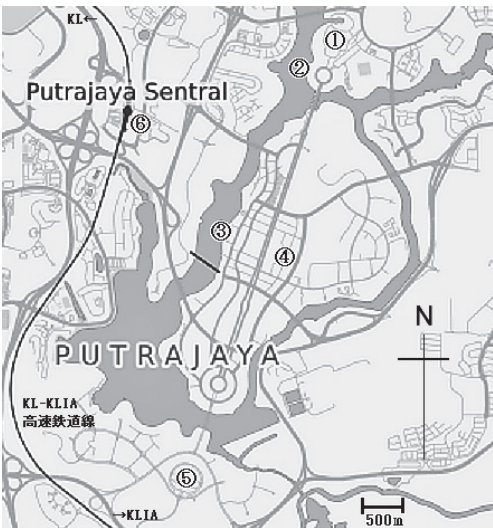
このような中東イスラームに範を求めるイスラーム的意匠の集大成ともいえるべきものが、90年代後半にクアラルンプールからの行政機能の移転を目的として建設が開始された、行政首都プトラジャヤであり、その代表的建築物であるプトラ・モスクにほかならない。

3 プトラジャヤとイスラーム的都市景観

クアラルンプールから行政機能を郊外に移転させる計画は、1981年にまでさかのぼる。構想開始からおおよそ10年、1992年3月まで検討が重ねられた結果、5カ所の候補地のなかからスランゴール州-span地区のプラン・ブサル（現在のプトラジャヤ）に閣議で正式選定されたのは、1993年6月2日のことであった。新行政首都への機能移転が検討されたのは、第一には

クアラルンプールで進行する都市過密化への対応であり、第二に、これまで市内各所に点在していた各省庁を一カ所にまとめるためであった〔Esa 1997: 187〕。

新行政首都にこの地が選ばれた理由には、次の三点が挙げられている。第一に、当時マレーシアでは東南アジアのハブ空港となるべく、スバン国際空港にかわる新空港（クアラルンプール国際空港：KLIA）の開港を予定していたが、候補地が新空港予定地とクアラルンプールの概ね中間に位置していたこと。第二に、候補地にはすでに良好なインフラが整備されていたこと。第三に、候補地がアブラヤシのプランテーションであり、地権者の数も限られ、そこに居を構える住民がほとんどいなかったこと。以上の三点である〔King 2008: 131〕²⁾。



Map data @ OpenStreetMap Contributors

図1 プトラジャヤ中心部

- ① 首相官邸
- ② プトラ・モスク
- ③ アイアン・モスク
- ④ 連邦裁判所
- ⑤ 国際会議場
- ⑥ プトラジャヤ駅

1994年2月にはマハティールによって「公園都市コンセプト」が決定され、同10月に最終案が提示された。さらに新行政首都は、ペトロナス・ツインタワーを擁するクアラルンプール・シティ・センター（KLCC）を北端とし、開港予定の新空港（KLIA）を南端とする南北におおよそ51キロにおよぶマルチメディア・スーパー・コリドー（MSC）を構成するものとされた。MSCは2020年構想実現のための牽引となる地域であり、世界から先端的IT企業が誘致されるとともに、高速鉄道、高速道路、高速デジタル回線網などが整備されている。

1997年のアジア経済危機によって若干の遅れはあったものの1999年から行政機能の移転が開始され、2001年2月1日、行政区分としてはスランゴール州に属していたプトラジャヤ

はスランゴール州から連邦政府直轄領へと編入された。

プトラジャヤの総面積はおおよそ4,930ヘクタールで、うち38パーセントが公園や人造湖、湿地などにあてられている。湿地や人造湖はあわせて約600ヘクタールであり、都市景観を高めるとともに、都市の冷却機能を担っている。2010年時点での総人口は約68,000人であり、将来的には全体で330,000人の人口が見込まれている³⁾。

プトラジャヤは、首相官邸をはじめとする各省庁の建築群や商業施設が集まる中核エリアとそれを取り巻くように広がる周縁エリアとに区分される。中核エリアは、政府、商業、公共文化、混合開発、スポーツとレクリエーションという五つの地区（precinct）からなる〔Esa 1997: 188〕。とくに中核エリアでも首相官邸が位置する政府地区は、プトラジャヤの象徴的中心となっている。首相官邸からは南南西の方向に100メートル幅の直線道路が国際会議場まで

一直線に延び、プトラジャヤ全体の中心軸となっている。これは都市には中心となる軸が必要との設計者の考えから、第一に構想されたものである〔King 2008: 150〕。首相官邸のすぐ前には円形の広場（プトラ広場）が広がり、国家を象徴するかのように中央に国旗が立ち、それを囲むように各州の州旗が配されている。首相官邸から延びる中心軸の左右には各省庁の建物が建ち並んでいるが、首相官邸の位置が小高い丘状になっているため、まさに省庁を見下ろすような配置である。

中核エリアは、あきらかにイスラームに重きが置かれた都市景観となっている。首相官邸はイスラームを象徴する色彩である緑色を基調とする建物で、左右対称に両翼が広がり、その中央部分にはおなじく緑色のドームが冠されている（写真6）。このドームはマハティールの出身地でもあるマレー半島北部ケダ州の州都アロー・スターにあるザヒール・モスクに似せて造られている⁴⁾。



写真6 首相官邸

首相官邸のすぐ近くにはプトラジャヤの象徴ともいべきプトラ・モスクが建っている。淡いピンク色をしたこのモスクは、首相官邸と好対照をなし、プトラジャヤの中心に独特な景観を形作っている。中心軸のもう一方の端に位置する国際会議場とのちょうど中間あたりには、中心軸と直角に交わるように、連邦裁判所（最高裁判所）の建物（写真7）と、一般にアイアン・モスクと称されるトゥアंक・ミザン・ザイナル・アビディン・モスクが向き合っている。連邦裁判所の建物の上にもドーム状の意匠がほどこされ、首相官邸、連邦裁判所、アイアン・モスクが都市中心部の対角線の三頂点を成すかのように位置している。

ところで連邦裁判所にドームというイスラームの意匠が施されていることは、マレーシアの裁判制度にとって大きな意味をもっている。一般の裁判制度と、ムスリムのみを対象とするシャリーア裁判制度の二通りの司法制度を有するマレーシアでは、独立以来シャリーア裁判所は一般裁判所の下に位置づけられてきた。

しかし政府のイスラーム化政策の下で1988年の憲法改正により、シャリーア裁判所の地位が格上げされ、両者がたがいに独立、並存する裁判制度へと変更された。ただ両者で関与するような事案にたいしてはどちらが上位に位置するかは定かではなく、その時々



写真7 連邦裁判所（最高裁判所）

程でつねに議論の的として争われてきた⁵⁾。このような司法制度にあって、一般裁判所の最上位に位置する連邦裁判所の建物にイスラーム的意匠が施されたことは、司法もまたイスラームの下にあることを暗に示すものとなっている。



写真8 プトラジャヤの中心軸となる直線道路。一番奥に首相官邸が位置している。

中核エリアを取り囲む人造湖のさらに外側には、住宅地区として周縁エリアがひろがっている。周縁エリアの各地区は3,000戸おおよそ15,000人を想定して計画され、低価格帯から高価格帯までの住居が混在する形になっている。それぞれの地区では学校、病院、ショッピングセンター、モスク、多目的ホール、公園などが配置されている〔Dasimah 2007: 5-6〕。

プトラジャヤは、まさにイスラームが前面に押し出された人工都市である。イスラーム的な中核エリアと、計画的に設計された周縁

エリアとの組み合わせは、イスラーム的であり、かつ先進的である都市としてマレーシア以外からも大きな注目を集めている⁶⁾。

4 イスラーム的景観の理念と現実

クアラルンプールからプトラジャヤへの行政機能の移転は、先述の通り、きわめて現実的な要請から生まれたものである。とくにクアラルンプールの慢性的な渋滞は都市機能を大きく低下させるものであり、その解消は喫緊の課題であった。しかしその一方で、行政首都の建設がたんに現実の問題解消を目指してのものだけでないことも見落とすことはできない。とくにプトラジャヤの象徴的側面とでもいうべき点に目を向けると、プトラジャヤには、この国の統治のありかたについての理念をはっきりと読み取ることができる。このことは、プトラジャヤ建設に相前後する時期の政治状況を文脈化することで容易に理解されよう。

1980年代から1990年代にかけて、マハティール率いる政府与党であるUMNO（統一マレー人国民組織）は、国内、国外の双方において、それぞれ別の相手に対峙し、自らの政策の正当性を主張しなければならない状況にあった。そんななかで、いずれの相手にたいしても正当性の根拠としてもちいることができたのが、イスラームだったのである。

まず国内的には、イスラーム国家樹立を綱領に掲げるマレー系野党PAS（汎マレーシア・イスラーム党）との争いの激化を指摘しなければならない。1980年前後からマレーシアにおいても活性化したイスラーム復興運動を背景にしながら、80年代初頭にイスラーム指導層が主導権を手にしたPASは、UMNOにたいして、その世俗性を批判するという戦略を展開した。他

民族との協調路線を取り、経済発展や開発を重視するUMNOは、非イスラーム的、反イスラーム的であるというのである。これにたいしてUMNOが取ったのが、自らもイスラームであることを示す諸政策であり、PASよりも現実的にイスラーム理念を実現するというものであった⁷⁾。イスラーム復興運動指導者のUMNOへの取り込み、イスラーム銀行の設立、ハラール認証制度の国家的整備、国際イスラーム大学の誘致など、この時期に政府が展開した政策は、与党として、より現実的なイスラーム社会の構築を主張するものであった⁸⁾。

一方対外的には、この時期のマハティール（すなわちマレーシア政府）が強く打ち出していた、西洋（とくにアメリカ）にたいする批判的な、さらには挑戦的な立場を挙げることができる。これは直接的には、1997年のアジア通貨危機において、アメリカから求められたIMFの介入を拒否したことにはっきりとあらわれている。これ以外にも、マハティールが折に触れて唱える「アジア的価値」の主張や、2020年を目処に独自の先進国となることを国家目標として掲げた2020年構想など、いずれも自らの精神性、宗教性への回帰と、西洋に発するグローバル化の波への警戒や拒絶に基づくものであった。

このような政治的状况のなかで、マハティールその人によって構想、決定されたとされるプトラジャヤ建設においてイスラームの要素が重要な象徴としてもちいられたことは、ある意味当然のことであったかもしれない。

国内政治の文脈においては、理念のみに固執し、現実化の目処の立たないPASのイスラーム国家建設⁹⁾とは対照的に、マハティールはプトラジャヤというイスラーム的意匠に富んだ都市を実現させたのであり、しかもその都市の中心軸の頂点をなす位置に自らが座する首相官邸を置いたことが、この国の政治が、イスラーム的であり、かつそれはマハティール（UMNO）によって実現されるものであることをなによりも可視化することになった。

対外的な文脈においては、マルチメディア・スーパー・コリドー構想の中央に位置するプトラジャヤは、マルチメディア時代における技術的な先進都市というだけでなく、とくにアメリカなどを批判の視野に入れながら、都市計画に宗教的、道徳的価値を統合することが主張された〔Bunnell 2004: 100〕。プトラジャヤ建設に先んじて、マレーシアの都市・地方計画局（Jabatan Perancangan Bandar dan Desa）は、今後の都市計画の基本におかれるべきものとして「総合計画綱領」（TPD）を策定した。これは、新たな行政首都は「楽園都市（bandar firdaus）」であるべきとのマハティールの要請を受けたものであり〔Bunnell 2004: 101〕、人、創造主、環境という社会的基盤を構成する三つの関係性のなかで精神性を都市計画に組み込むことを目的としていた〔Norhaslina 2009: 341〕。非ムスリムにも配慮すべく創造主というのはすべての宗教における創造主であるとされたが〔Bunnell 2004: 101〕、プトラジャヤにおいては事実上イスラームにおけるそれを意味していた。当時の都市・地方計画局局長は、「楽園（firdaus）」の概念について、清潔な水、公園、モスクの中心性といったプトラジャヤにおける都市デザインの特徴がそれにあたると説明しているが〔Bunnell 2004: 101〕、果物が豊富に

繁り、腐ることのない水が流れる場所とはまさにコーランに描かれた天国のイメージであり、モスクの中心性への言及とともに、ここでいう「楽園」とはイスラームにおける楽園であることはあきらかである。

国内的、対外的双方の側面におけるプトラジャヤを介してのイスラームの主張は、それと表裏一体なものとして、マレーシアのさらにもうひとつ別の姿を示している。それは理念としてイスラームを掲げることに比例するかのように生じる、非ムスリム、すなわち非マレー系の人々にたいする潜在的な排除である。

近代以降のマレーシアの都市は、多民族、多文化、多宗教であることをその特色としていた。これは先述の通りイギリス植民地時代、錫鉱山やプランテーションの労働力として移住してきた中国系、インド系の人々が定住した場所が、植民地経済体制に組み込まれつつ都市として発展したことによる。植民地時代、マレー系の人々は主に地方で農漁業に従事していたが、彼らの多くが都市へと移住するようになったのはいわゆるマレー系優遇政策が強化された1970年代以降のことであった。その結果、都市では仏教寺院、ヒンドゥー寺院、キリスト教会、モスクなどが文字通り混在し、住民という点からも、あるいは都市景観という点からも、都市は大きな多様性を示していた。

これにたいしてプトラジャヤは、行政機能の移転という目的のため、この街に移り住む者の多くが公務員や政府系機関の職員であり、その結果、必然的にマレー人ムスリムのみが暮らすモノトーンの都市となっている¹⁰⁾。都市中心部にそびえるイスラーム的な意匠に溢れた壮麗な建築群と、それを取り巻く形で、おなじようなコンドミニウム、戸建住宅、リンクハウスなどからなる居住地域の広がり、都市の景観を文化的、民族的にきわめて単調なものにしている。都市計画上は、キリスト教会や仏教寺院など、イスラーム以外の宗教施設にたいする建設地も組み込まれていたが、それらの宗教施設はいまだ建築されるにいたっていない〔Moser 2012: 2921〕。

プトラジャヤはクアラルンプールとの対比のなかでとらえてこそ、その位置づけが十全に理解される〔King 2008〕。他のマレーシア諸都市、そのなかでもとくにクアラルンプールとの対比でプトラジャヤをとらえると、後者はまるで前者を全否定するような様相を呈している。多様で多くの大都会に共通するような複雑性、猥雑性、ダイナミズムを持つクアラルンプールにたいして、人工的に造られたプトラジャヤは、秩序づけられ、「いかがわしさ」は皆無であり、現実においても非常に静かな街である。クアラルンプールからプトラジャヤへという実質上の首都機能の移転は、多民族、多文化、多宗教国家マレーシアの政治力学の中心がいまやどこにあり、近い将来先進国となったときにいったい誰が握っているべきなのかを端的にあらわしている。

5 「テーマ化」「俗都市化」するプトラジャヤ

プトラジャヤをめぐる政治力学を背景に考えると、前節で見た通り、プトラジャヤはマレー人ムスリムが国家の主役であることを表象すべく、イスラーム理念に基づいて建設された都市である。しかしながら、プトラジャヤが現代というまさにこの時代に建設された都市であるという点を鑑みれば、プトラジャヤの様相はまた違った形で立ち現れる。プトラジャヤという都市の本質は、たんにイスラーム的な都市であるということにあるのではなく、イスラームであることを強く謳いながらも、それにもかかわらず世界の他の都市ともグローバルに共通する現代都市としての側面も備えているという点にこそ見いだされなければならない。

マハティールが考えるマレーシアの将来像（2020年構想）を都市として先取りしたかに見えるプトラジャヤは、その一方で、二つの点でマレーシアの現実から大きく乖離している。第一にそれは、前節で述べたようにマレーシア諸都市の特徴である多民族性をまったく備えない都市であるという点であり、第二に、プトラジャヤによって表象されるイスラーム的意匠がマレーシアで蓄積されてきたそれとは根本的に異なる様相を呈しているという点である。イスラーム的な都市であることの追求によって、マレーシアという場所や歴史から切り離された空間がもたらされたのである。

先述の通り、1980年代からクアラルンプールおよびその周辺都市で建設された主たるモスクは、中東のイスラームに範を求めるものが多くなった。プトラジャヤにおいても同様であり、たとえばプトラジャヤの中心的存在であるプトラ・モスク全体のデザインはペルシアのサファヴィー朝（16～7世紀）のそれに基づきながらも、116メートルの高さを誇るモスクの尖塔はバグダッドのシェイク・オマール・モスクの塔を模したものである（写真9）。また、モスク



写真9 プトラ・モスク

土台の壁面はカサブランカのハッサン国王・モスクに類似する¹¹⁾。これらのモスクの形状が、植民地化以前のこの地のモスクのそれとも、植民地時代にイギリス人技師のオリエンタリズム的想像力によって建てられたそれとも異なっているのは、あきらかである。

イスラーム的意匠の借用はモスクだけにかぎられるものではない。プトラ・モスクの前方、プトラ広場から中心軸として南進する直線道路が人造湖をまたぐところにかかる橋（プトラ橋）は、イラン・エスファハーンの

ハージュ橋を模したものである¹²⁾（写真10）。プトラ・モスクに隣接する場所には、スークと称される観光客を対象としたショッピングエリアが設けられている。スークとはもちろんアラ

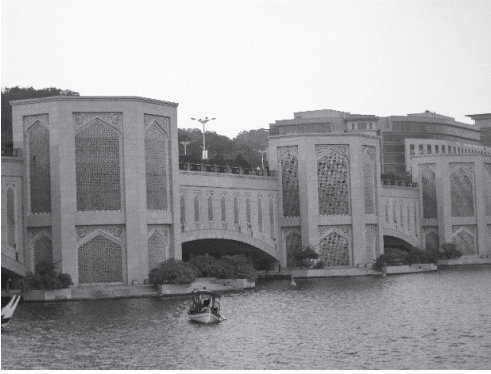


写真10 ブトラ橋

ビア語で市場を意味するものであり、中東イスラーム世界においては商業ネットワークを支える都市の欠くべからざる部分としてあることはいうまでもない。さらには、ブトラジャヤ第二のモスクであるアイアン・モスクの入り口から礼拝ホールへいたる橋状の通路は、スペインのアルハンブラ宮殿の意匠を真似てデザインされている¹³⁾。植民地時代のイスラーム表象の名残をとどめる首相官邸や連邦裁判所のドームも含めて、ブトラジャヤに特徴的

な景観は、様々な断片の借用という意味において、他のどこにもないイスラームをモデルとしながら成り立っているのである。

このような中東の「高イスラーム (High Islam)」〔Moser 2012〕からの借用の多用を、中東イスラームにたいするイスラーム「辺境」地域の劣等感ゆえのことと考えるか、あるいはマレーシアがイスラーム世界全体を集約するような指導的な立場に立とうとする思惑ゆえのことととらえるか〔Mohamad Tajuddin 2005: 25-26, 49〕は評価がわかれるところである。しかしここで都市ブトラジャヤを考えるうえで重要な点は、ブトラジャヤという都市がマレーシアの地域性や歴史性とは切り離された要素の借用によって構築されているという事実である。

近年、世界規模での都市間競争が高まりを見せるなかで、各都市は自らの特色を最大限に発揮すべく他にはない街作りを模索している。そのために試みられてきた方策のひとつが、ある場所にテーマを与えることで場所の独自性を創出しようとする企てであろう。それが都市であろうが、特定の空間であろうが、あるいは娯楽やショッピングの施設であろうが、場所のテーマ化は現代社会に特徴的な空間構成のあり方ということができよう。

このような、都市をも含めた様々な場所や施設のテーマ化の広がりについて、プライマンは「ディズニー化」なる概念をもちいてそれを説明している〔プライマン 2008〕。「ディズニー化」とは「ディズニー・テーマパークの諸原理がアメリカ社会および世界の様々な分野に波及するようになってきているプロセス」〔プライマン 2008: 14〕を指す。諸原理とは「テーマ化」のほかに「ハイブリッド消費」「マーチャンダイジング」「パフォーマティブ労働」からなるが、「テーマ化」はディズニー化のなかでも「最も際立った次元」〔プライマン 2008: 40〕とされる。テーマ化はナラティブ（物語）の適用によって為されるが、テーマの源泉が通常はテーマの対象となる場所や組織の外にあることで「外在的な客体」〔プライマン 2008: 40〕として姿を現すことになる。場所がテーマ化されるのはもちろん消費社会化された現代社会において、競合する他者との差異化を図るためであり、テーマ化することで消費者に「感覚を刺激する楽しい経験」〔プライマン 2008: 42〕を与えることが目的とされている。したがって言葉の厳密な意

味では、プトラジャヤのイスラーム的意匠は、ブライマンが想定するテーマ化とは少し異なるかもしれない。しかし、消費の促進は別にして、外部にある要素を建築意匠にナラティブとして組み込み、その結果「外在的客体」としてのイスラームを想定させることで独自の都市として他との差異化を企てている点は、プトラジャヤもまた、ディズニー化の一要因としてのテーマ化を実現させている例として考えられよう。プトラジャヤの特徴的な景観が、いまや観光対象として消費されていることもこの点を間接的に証している。

テーマ化は、対象にたいして現実の姿を超えた意味や象徴性を与えることで、対象を実際よりも魅力的で興味深いものへと変えることができる〔ブライマン 2008: 40〕。もともとは広大なアブラヤシ・プランテーションであった土地に街が開かれ、マレー人、すなわちムスリムの人々が移り住み、その上でイスラームというテーマが与えられたことで、プトラジャヤは先進的なイスラーム都市という地位を確固たるものとして手に入れたのである。

しかしながら、現代社会における都市を考える上でさらに重要なことは、世界の各地域や都市がテーマ化を追求したことで独自性に富んだ諸地域や諸都市が生み出されたかといえば、必ずしもそうではないという点であろう。それぞれの都市がテーマで自らを特徴付ける一方で、逆に都市同士の景観やそこでの生活は、まるでたがいがたがいのクローンであるかのようにきわめて似かよったものとなっている。これは、独自性を追い求めるさいの枠組みや方式や発想自体がすでにグローバルに共通化しているゆえのことである。このような都市の共通化の進行について、ムニョスは、「俗都市化」という言葉で表現している〔ムニョス 2013〕。

彼によれば、「俗都市化」は次のような三つの平行する過程によって定義される〔ムニョス 2013: 65〕。第一に、経済的、専門的な機能特化であり、それによって都市の持つ複雑性が失われるとともに、景観も均質化する。第二に、都市空間における形態的セグリゲーションであり、それによって専門特化し、たがいに隔離された自閉的な空間が島状に生産される。第三に、第一、第二の過程の帰結として、都市空間のテーマ特化が現れる。もちろんこれらの過程は都市ごとに多様な道筋を通して展開される。しかしグローバルな資本の流れ、観光産業などの拡大に伴う都市イメージの重要性の圧倒的な高まり、技術革新による生産と土地との結びつきの消滅などによって、あらゆる都市で俗都市化の過程は進行し、都市は均質で平俗なものとなっていく。

俗都市化した都市の景観の平俗化について、ムニョスは、ボードリヤールを援用しつつ次のように説明する〔ムニョス 2013: 210-214〕。ロサンゼルスやラスベガスのカジノではヴェネチアを模したコピー、たとえば運河、木橋、ゴンドラ、鐘楼などヴェネチアを構成する断片が再現されている。これらはヴェネチアのコピーでありながらも、都市の主たる特徴が一カ所に集約されているため、モデルとして理解されたヴェネチアを基につくられた合成物としてとらえることができる。このような集大成的なイメージは世界のいかなる地域にもクローン化が可能であり、オリジナルのコピーというよりも、世界中でたがいに等価なシミュ

レーションとなっている。

「俗都市化」の議論に照らし合わせると、プトラジャヤもまたその流れのなかにある都市のひとつとしてとらえることは容易であろう。行政機能に特化した専門的都市として構築された結果、クアラルンプールなどが有していた多様性とは正反対に、マレー人ムスリムの、しかも政府系機関に職を得ることができる中間層からそれ以上の階層の者のみが居住する街となる。プトラジャヤ自体が他の諸都市からは隔絶しているだけではなく、プトラジャヤ内部においても、地区の機能ごとにセグレーションが存在する。政府とマレー人がプトラジャヤで結びつくとき、その街がイスラームをテーマとするのも必然である。

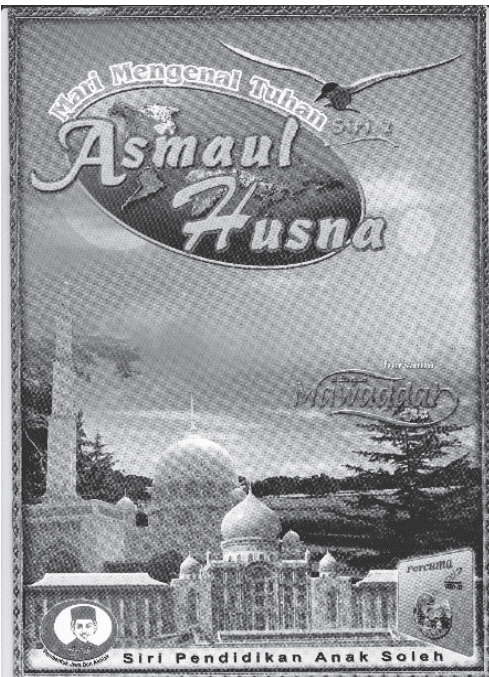


写真11 子供向けのイスラーム教育冊子、アッラーの呼び方（99通りあるとされている）を学ぶためのもの。

もちろん、テーマのもとになったイスラームは、どこかにオリジナルが存在するコピーとしてのイスラームではない。それは、本来の歴史的、地域的文脈からはもはや切り離されたイスラーム的意匠の断片がプトラジャヤで再合成された、モデルとして理解されたイスラームである。しかしモデルとして理解されたイスラームは、たとえば子供向けのイスラーム教育冊子の表紙にプトラジャヤのイスラーム的意匠が描かれることなどが繰り返されるなかで、オリジナルのない複製としてのシミュラクルとなるのである（写真11）。

プトラジャヤは、たしかにイスラームが特徴的な都市である。しかし都市存立の機構にまで掘り下げれば、表面のイスラームは霧消し、我々の同時代の都市として、その姿を現すのである。

6 むすび

イスラームはそれを信奉する者につねに「よりイスラーム的」であることを求める宗教である〔多和田 1991, 2005:37-47〕。神の言葉であるコーランと預言者ムハンマドの言行こそが絶対的な真実であり、それを実践することが絶対的な正義であるとされる以上、ムスリムの行為は、理念上はすべておなじ方向を目指している。しかし、現実を生きる存在としてのムスリムにとっては理念を実現させることは絶対的に不可能な試みであり、ムスリムによるイスラームの実践とは、不可能であるにもかかわらず理念へと向かう指向性としてとらえられなければな

らない。

このような理念と現実との乖離は、現代社会におけるほど、より顕著な形で現れる。イスラームが誕生したときからすでに1400年以上が経過したという時代的な違いに加えて、価値の多様化、技術の複雑化、社会生活の高度化などがグローバルに相互影響し合うという現代社会の特徴が、理念と現実との乖離をますます大きく広げている。

それでは現代社会において、イスラーム的であることはいかなるメカニズムによって支えられているのであろうか。もちろんイスラームがアッラーの言葉を絶対的な基盤とした宗教である以上、イスラームの実践が理念によって支えられていることは疑いようがない。しかし、冒頭でも述べたように、イスラームもまた現代社会のなかにあり、ムスリムもまた現代社会を生きる存在なのであるから、イスラームを理念のみに追い求めるような理解の仕方は誤っているといわざるをえない。

本稿で示されたのは、イスラーム的意匠をまとった都市が、都市が置かれた政治状況のなかで形成され、また現代都市に共通する都市のありかたの枠組みにしたがっていることであった。マレーシアの都市では、イギリス植民地時代以前から現代にいたるまで、その時々の権威がイスラーム的であることを目指して追い求めるイスラームの姿が刻まれてきたのである。13世紀以降に根付いたイスラーム、イギリス植民地官僚にイメージされたオリエンタリスト的なイスラーム、ナショナリズムの熱とともにあった土着のイスラーム、そして中東のイスラームへと、都市のなかでつねにイスラーム的なものの創造・想像が繰り返されてきた。

グローバル化と消費社会化が進展した現代にあっては、イスラーム的なものへの追求に、さらに別の力が作用する。複製技術が高度化しメディアが発達した現代にあっては、いかなる時代や地域の、いかなるものも、どこか別の世界に容易にもたらされうる。イスラーム的な意匠も例外ではない。イスラームもまた特定の地域性、歴史性という文脈から遊離され、それぞれのムスリムが追い求めるイスラーム的であることに合致したイスラームが想像として生み出される。ある特定の時代、地域に範を求めるのではなく、様々なイスラーム要素を借用し、それを組み合わせることで何ものかを創作するという行為は、現代消費社会における「データベース消費」(東 2001)と本質的には同一であろう。現代では、イスラームもまたデータベースとして消費されうるのである。

本稿で取り上げた都市の意匠だけではなく、慣習にしる、制度にしる、イスラームにかんするものはすべて「我々の」生とは本質的に異なるものとして理解されてきた。しかし本稿においてあきらかにされたように、現代にあってはイスラームがイスラームの論理だけで実践されることはありえない。現代イスラームを十全に理解するためには、これまで等閑視されてきたイスラームのありかたすらも左右するような、外部からの「力」に目を向けることが必要である。

【付記】

本稿は2015年度日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））「イスラームの商品化に見る宗教実践と経済活動の相関に関する実証的研究」によって実施された研究成果の一部である。

【注】

- 1 プトラジャヤの住宅街ではコミュニティ意識を醸成するため各戸を塀で囲わない「フェンスレス」という概念がもちいられた。これはセキュリティ対策で家屋を嚴重に囲うクアラルンプールなどの一般的な住居形態とは好対照を成している。「フェンスレス」ガイドラインやそれに関心する住民の意識については、Roslan（2011）による住民アンケートによる分析がある。
- 2 しかし現実にはプランテーションで働くインド系労働者の移転、補償問題が生じている〔Bunnell 2002: 281-285〕。
- 3 それぞれの数値は、2010年の人口についてはマレーシア政府統計局発行の *Laporan Kiraan Permulaan 2010* の数値を、それ以外については Azizan（2002, p.183）の表の数値をもちいている。
- 4 “Office of the Prime Minister, Putrajaya, Malaysia”,
<https://www.pmo.gov.my/home.php?menu=page&page=1656> (accessed on 26/Aug/2015)
- 5 たとえばイスラームから非イスラームへの改宗がこれにあたる。イスラーム教義では棄教は許されない行為であるため、現在のマレーシアの法制度では改宗の是非がしばしば裁判所で争われる。そのさい二種類の司法制度のどちらの管轄になるかが争点となってきた。イスラームからの改宗をめぐる事例分析については、多和田（2007）を参照。
- 6 一例をあげるとインドネシア・ピンタン島に隣接するドンバ島において、プトラジャヤを模した都市建設の計画が進行中である〔Moser 2012: 2928-2929〕。
- 7 マレーシア政治におけるイスラームを主題とする与野党間の争いについては多和田（2005）を参照。
- 8 UMNOとPASの間ではマレーシアがイスラーム国家であるか否かがつねに問題にされてきた。両者の「イスラーム国家」論争については多和田（2010）を参照。
- 9 たとえばPASは自らが政権の座にある地方の州でフドゥード法の導入を試みている。フドゥード（単数はハッド）とは窃盗や姦通などコーランおよびハディース（預言者言行録）で刑罰の内容までが規定された罪であり、手足の切断や投石による死刑などの罰則がある。しかしマレーシアの連邦と州の関係、連邦憲法と他の法令との関係などからフドゥード法は当該の州議会で可決されたものの、施行されえないという状態に置かれている。
- 10 マレー系優遇政策のなかで、マレーシアでは公務員の圧倒的多数はマレー人である。
- 11 <http://itc.gov.my/mosque/masjid-putra-putra-mosque/> (accessed on 6/Sep/2015)
- 12 http://www.ppj.gov.my/portal/page?_pageid=311,1&_dad=portal&_schema=PORTAL#1302 (accessed on 6/Sep/2015)
- 13 <http://islamic-arts.org/2012/the-iron-mosque/> (accessed on 6/Sep/2015)

【参考文献】

Azizan Zainul Abidin

2002 “Putrajaya” Yeoh, M. (ed.) *21st Century Malaysia: Challenges and Strategies in Attaining Vision 2020*, London: Asean Academic Press, pp.181-186.

東裕紀

2001『動物化するポストモダン』（講談社現代新書）

ブライマン、アラン（能登路〔監訳〕、森岡〔訳〕）

2008『ディズニー化する社会』（明石書店）

Bunnell, Tim

2002 “Multimedia Utopia?: A Geographical Critique of High-Tech Development in Malaysia’s Multimedia Super Corridor”, *Antipode: A Radical Journal of Geography*, vol.34, no.2, pp.265-295.

- 2004 *Malaysia, Modernity and the Multimedia Super Corridor*, London and New York: Routledge.
- Dasimah Omar
2007 "Putrajaya New Town and the Quality of Life", *Built Environment Journal*, vol.4, no.1, pp.1-9.
- Esa Mohamad
1997 "Putrajaya: The Administrative Capital City of Malaysia in the 21st Century", Asian Strategy and Leadership Institute (ed.) *Malaysia Today: Towards the New Millennium*, London: Asean Academic Press, pp.181-192.
- Furnivall, John S.
1948 *Colonial Policy and Practice: A Comparative Study of Burma and Netherlands India*, Cambridge: Cambridge Univ.Press.
- Goh, Beng-Lan and David Liauw
2009 "Post-colonial Projects of a National Culture: Kuala Lumpur and Putrajaya", *City*, vol.13, no.1, pp.71-79.
- Gullick, John. M.
1994 *Old Kuala Lumpur*, Oxford: Oxford Univ. Press.
1998 "The British 'Raj' Style", Chen Voon Fee (ed.) *The Encyclopedia of Malaysia: Architecture*, Singapore: Archipelago Press, pp.82-83.
- Kamaruddin Mohd. Ali
1997 "Architecture: Unity of the Sacred and the Profane", Mohd. Taib Osman (ed.) *Islamic Civilization in the Malay World*, Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, pp.245-277.
- King, Ross
2008 *Kuala Lumpur and Putrajaya: Negotiating Urban Space in Malaysia*, Singapore: NUS Press.
- Mizan Hashim, David
1998 "Indian and Mogul Influences on Mosques", Chen Voon Fee (ed.) *The Encyclopedia of Malaysia: Architecture*, Singapore: Archipelago Press, pp.84-85.
1988 "Western and Modernist Influences on Mosques", Chen Voon Fee (ed.) *The Encyclopedia of Malaysia: Architecture*, Singapore: Archipelago Press, pp.86-87.
- Mohamad Tajuddin Mohamad Rasdi
1999 *Seni Bina di Malaysia: Kritikan tentang Seni Bina Islam, Identiti Nasional dan Pendidikan*, Kuala Lumpur: Design Modular.
2005 *Malaysian Architecture: Crisis within*, Kuala Lumpur: Utusan Publications and Distributors.
2007 "Mosque Architecture in Malaysia: Classification of Styles and Possible Influence", *Journal Alam Bina*, vol.9, no.3, pp.1-37.
- Moser, Sarah
2012 "Circulating Visions of 'High Islam': The Adoption of Fantasy Middle Eastern Architecture in Constructing Malaysian National Identity", *Urban Studies*, vol.49, no.13, pp.2913-2935.
- ムニョス、フランセスク (竹中、笹野 [訳])
2013 『俗都市化：ありふれた景観 グローバルな場所』(昭和堂)
- Norhaslina Hassan
2009 "Urbanisation and Growth of Cities in Malaysia", Abdul Razak B. (ed.) *Malaysia at 50 and Beyond*, Kuala Lumpur: Malaysia Strategic Research Centre, pp.307-351.
- Pertubuhan Akitek Malaysia
2007 *Architectural Heritage: Kuala Lumpur – Pre-Merdeka*, Kuala Lumpur: Pertubuhan Akitek Malaysia.
- Roslan Talib
2011 "Post-Occupancy Evaluation on the Selected Government's Double Storey Terrace Housing Units in Putrajaya, Malaysia", *Asian Culture and History*, vol.3, no.1, pp.125-137.
- 多和田裕司

- 1991 「マレー・イスラームの諸相」『年報人間科学』第12号、pp.53-66.
- 2005 『マレー・イスラームの人類学』（ナカニシヤ出版）
- 2007 「現代マレーシアにおける棄教：「制度化」されたイスラームの一断面」『人文研究』第58巻、pp.212-226.
- 2008 「現代マレーシアにおける多妻婚の「制度化」：イスラームと市民的価値の間で」、『人文研究』第59巻、pp.140-153.
- 2010 「マレーシア・イスラームにおける「イスラーム」と「世俗」—「イスラーム国家」論争を中心に—」『人文研究』第61巻、pp.145-161.
- 2012 「イスラームと消費社会：現代マレーシアにおけるハラール認証」『人文研究』第63巻、pp.69-85.
- 2014 「観光の時代におけるイスラーム：マレーシアの事例から」『人文研究』第65巻、pp.163-178.
- 2015 「マレーシアのムスリム女性に見るイスラーム的装い：消費社会におけるイスラームについての一考察」『人文研究』第66巻、pp.195-210.

【2015年9月8日受付，11月9日受理】

Putrajaya—The Ideal and Reality of Islamic Urban Landscape

TAWADA Hiroshi

This paper examines how Islam is practiced in globalized society through a case study of Islamic architecture, with special reference to Putrajaya, Malaysia's new administrative capital. With the development of "Islamization" since the 1980s, the Malaysian state has adopted Middle Eastern Islamic styles for national buildings instead of vernacular and modernist ones used before. In this paper, I will clarify this recent change of the architectural style and urban landscape. After the introduction, Part 2 shows the transition of architectural style of prominent mosques in Malaysia. Part 3 describes the formation of Putrajaya and its Middle Eastern Islamic aesthetics of architecture and landscape. Part 4 argues this Middle Eastern orientation in architecture with the relation of Malay politics between UMNO and PAS, and also ethnic politics between Malays and non-Malays. Part 5 discusses the orientation to Middle Eastern Islam of Putrajaya as "theming" (one of the four trends of Disneyization) and "urbanalization". Part 6 concludes that "Islamization" of Putrajaya is driven by both Islamic principle and the factor common to cities in postmodern age.